

情報

第9回国際サゴシンポジウム (The 9th International Sago Symposium) 報告

江原宏・三島隆

(三重大学大学院生物資源学研究科)

第9回国際サゴシンポジウム (The 9th International Sago Symposium) がフィリピン・レイテ島レイテ州オルモックのサビンリゾートホテルにおいて、2007年7月19～21日の3日間、ピサヤ州立大学、フィリピン根栽類研究・トレーニングセンター、日本学術振興会の共催で、国連食糧農業機関 (FAO) からの来賓臨席のもとに開催された。今回の主題は、「食料・工業原料としてのサゴデンプンの潜在能力の利用促進」であり、フィリピン各地、マレーシア、インドネシア、タイ、日本、オーストラリア、オランダから様々な専門領域の研究者が参加し、次の点を目的として幅広い議論が展開された。

1. 食料、工業製品などサゴデンプンの用途拡大の推進
2. 推奨すべきサゴヤシ研究と開発計画の立案
3. サゴヤシ研究の成果や調査結果などの情報交流
4. サゴヤシ研究者間のネットワークの形成

初日のフィリピン農林業自然資源研究開発会議の Patricio Faylon 所長による「フィリピンにおけるサゴヤシ研究の歴史と今後の展望」に関する基調講演の他、口頭発表 39 題、ポスター発表 5 題がエントリーされ、上記 4 課題にそった講演、報告が行われた。なお、日本作物学会からは 5 名が参加した。研究発表の内容は、遺伝的特性と多様性、生理生態的特徴、栽培・培養、土壌環境、生産性、澱粉抽出・精製、デンプンの構造、食品開発、プランテーション、原産地からアフリカへの導入など多岐に渡り、各分野における最新の研究情報が報告され、活発な議論が行われた。

会期中には、各国の代表によるビジネスミーティングの時間が持たれ、シンポジウムの総括と今後の開催などにつ

いて討議された。概要は次の通りである。

- ・国際的に情報交換をしながらサゴヤシ研究や開発について、各国政府、研究機関及び研究者に専門的な立場から効率的な助言を行うアドバイザーグループを組織し、二酸化炭素の低減など環境問題、生分解性プラスチックや生物燃料といったサゴデンプンの潜在的利用の拡大、食料や収入の確保といった貧困問題の解決を目指す。
- ・各国でサゴヤシ遺伝資源の保護、保全を行い、資源の交換は研究目的に用いる。商業利用する場合には許可を必要とし、安全性を確保する。
- ・専門用語、およびその利用についての整備を行う。
- ・サゴヤシ研究と普及の推進に向け、資金の確保を図る。
- ・次の第 10 回シンポジウムはマレーシア・サラワク州で開催する。

最終日には、エクスカージョンが行われ、参加者はレイテ島東部にある稲作地帯に点在するサゴヤシ生育地、タクロバン市南部では自生地を訪ねた。バリナリー地区では、髓組織からのデンプン抽出工程 (粉碎した髓から少量の水でデンプンを濾し出す方法で、上澄み部分の水を何度も繰り返して濾し出しに使う：一般的な水を掛け流す方法と異なる) を視察した。また、ピサヤ州立大学が開発したラスパー (髓を磨碎する機械) のデモンストレーションも行われ、参加者の注目を浴びていた。

近年、石油に替わるエネルギーの原料としてデンプンや糖資源に期待が寄せられているが、食料・飼料とエネルギーの間に新たな競合が生じて問題となっている。従って、アルコール転化資源としてデンプンを利用するに当たっては、現在の食料生産レベルを圧迫することのない新規デン



写真1 開会式でのフィリピン国家斉唱。



写真2 タクロバン市南部のサゴヤシ自生地。

ブン資源植物の開発, すなわち耕作に不向きな土地でも生育・生産できる形質を備えた植物の資源化が望まれる。このような背景から, 主要作物が生育できない熱帯の低湿地にも良く適応し, 多量のデンプンを生産できるサゴヤシの生育・生産特性に対する期待が益々高まっている。シンポジウム終了後に FAO からは, サゴヤシ研究・普及に向けた関係各国の人的ネットワーク整備の必要性が指摘されている。これまで計 10 回にわたる国際シンポジウム (第 1

～9 回および SAGO 2001) を通して築かれた研究者間の交流を十分に活かし, 機動力の高い国際共同研究グループが組織され, 熱帯低湿地の生産性が低い地域の開発と持続的資源植物生産を通じた食料生産ならびに所得の確保, さらには代替エネルギー原料の確保やバイオプラスチックの実用化を通じたクリーンライフの実現に寄与し得るプロジェクト研究が推進されることに期待したい。